
気まぐれな夏のサンタ

紅玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれな夏のサンタ

【ZINE】

N9783E

【作者名】

紅玉

【あらすじ】

「Xmasの贈り物」のその後は…（番外編）傍若無人なあいつを上回る人物が登場！！あれ？かなり振り回されてる？あいつの目的は何だ？！

1（前書き）

連載（完結済）「Xmasの贈り」の番外編となっていますので、まだ本編を読まれていない方は、先にそちらを読まれる事をお勧めいたします。

青い瞳の彼は居た。

純粹そうな色の瞳なのに、彼の本質が邪魔しているのか、全く善人には見えない。かと言つて、悪人という程容姿が悪いわけでもない。寧ろ、整つた顔立ちをしている。

彼は久しぶりに、自分の生まれた町へと帰つて来ていた。彼の中に、郷愁という感情はない。

だが、帰つて来た。何故かといつその理由は後にわかるだろ？

「やあ、ゆきんこ」

ゆきんこは、ドキリとした。

自分をゆきんこと呼ぶのは、幼なじみの彼とあの悪魔ぐらいである。そして今、この声はその後者であるに違いない。まあ、前者であつてもいい事はないのだが。

幻聴であつて欲しい。

ゆつくりと振り向くゆきんこ。

爽やかな笑顔を見せる彼に、青ざめるゆきんこ。

「な、な、な、何で帰つて來た！？」

ゆきんこは彼と同じ青い瞳を大きく見開いて、驚いていた。

「ゆきんこ、その口の利き方はないだろ？」

彼は笑顔のまま、自分とは違う白髪の頭をわしづかみにし、力を込めた。

「いでででつ！？」

涙目になるゆきんこ。

「オレが帰つて來たんだ。ちゃんと迎えないとダメだろ？ナア、ゆきんこ！」

更に、力を込める。

「いでででで…あ、あ、だま、がヅブレ、ル！」

涙がボロボロと零れるゆきん」。

「たいした脳ミソ入つてないだろ?」

容赦のない攻撃はまだ続く。

「も、う、許じで」

ゆきん」ギブアップ!

試合終了の「コング」が鳴った!!

彼は尚も力を込め、一瞬離したと同時に、強烈な鉄拳を振り下ろした。

「ふげつ!!」

ゆきん」ノックダウン!!

ゆきん」はしばらく頭を抱え、うずくまつて痛みを耐え忍んでいた。しかしながら、涙が溢れそうな潤んだ瞳で彼を見上げた。

「兄貴、お帰りなさい」

彼を目の前にして、本来言わなければいけない正しい言葉。

「ただいま」

満面の笑みを見せる兄貴と呼ばれた彼。

そう、彼らは兄弟。

そして、彼らの名は…

兄が冬風夏丞

ゆきん」という呼び名を持つ弟が、冬風雪太

「よう、親父」

「てんめーつ！何しに帰つて来やがつた！！勘当されたクソ坊主が家の敷居跨ぐんじゃねえつ！！」

「勘当されたからつて、家に入っちゃいけないってのは可笑しいだろ？もう、他人なんだ。帰つて来たんじゃなく、訪ねて來た。オレは、客人だぜ？」

激怒する父親にこうも屁理屈を正論のように述べられるのは、この世で夏丞だけだろう。

「ハアツ！？ なんだそりやあ？！」

父親は頭に血が上るあまり、声が裏返っていた。

「さあ、お茶入れて」

そんな父親を尻目に、涼しい顔をしている夏丞。

「はい、かつくん」と、イギリス人の血を引く母親が、夏丞に麦茶を出した。

「おい、マリア！ 何、茶出してんだよーーー！」

父は、妻のマリアに突っ込む。

「え？ だつて、お客様でしょ？」

美しい微笑みを浮かべるのは計算なのか、はたまた天然なのか。

「マ、マリア」

いずれにしろ、父親はこの微笑みに弱い。震える拳に入れ、ぐつと堪えてしまう。

「兄貴はどうして帰つて…じゃなくて、訪ねて来たんだ？」と、雪太は夏丞に尋ねる。

「んー、今のところは秘密だな」

この時、雪太は嫌な予感がした。夏丞が悪戯っぽい笑みを浮かべ、隠し事をする時はいつもろくな事がない。

兄弟だからわかつてしまつ恐ろしさ。雪太は時たまこれが自分の兄である事を恨む。

「さて、ゆきんこ、電話」と、いつの間にか麦茶を飲み干した夏丞は手を差し出した。

「はい」

雪太は、電話の子機を渡す。

「おめえ、他人んちの電話使つんじゃねえよー」

父親は夏丞を睨むが、

「マリアさん、貸して下さい」と父親を無視して、母親に尋ねる。

「どうぞ」

笑顔で了承するマコア。

「マリア！」

父親の叫びはその場ではただ虚しいものでしかなかった。

夏丞は電話のボタンを押し、耳に宛てがう。

2回のコールですぐに相手と繋がった。

「毎度」「つ

向こうから聞こえてくるのは、関西弁。

「トンマか？」

「ああん！？何やいきなり！…！」

トンマと言われ、向こうからは怒りの声が聞こえてくる。

「オレだ」

「オレオレ詐欺？」

次に、怪訝そうな声が聞こえてきた。

夏丞は鼻で笑つた後、

「夏丞だよ」と、名乗つた。

「ま…まさか…カースケ！…？」

明らかに相手は動搖していた。

「ソリを貸して欲しいんだ。もちろん、トナカイ付きでね

「いややー！何でカースケに貸さなきゃあかんのや。俺はあんたに貸
しあつても、借りはないで…！」

夏丞は片方の口角を持ち上げると、ニヤリと笑つた。

「ウチのゆきんこ使つただろ？オレに無断で

「はあ！？」

訳がわからないと、相手は声を上げる。

「5年前の2月だよ

「5年前つて…」

今まで耳をそばだてていた雪太は、自分の記憶を思い起こす。そして、ろくでもない思い出と一緒に、電話の相手が誰だか悟つた。

「…せやかて、あれはゆきんじやる。何で、カースケが出てくんねん」

「ゆきんじは、オレの所有物だ。それは、オレに借りを作った事になる」

雪太は愕然とした。

オレって、物扱い！？しかも所有物！？オレに、自由はないのかあつ！？

「んな無茶苦茶やでほんま～。相変わらず、変な理屈捏ねような」

相手は呆れたように溜め息をつくと、

「ええよ。タダはいややけど3割までやるわ」と、言った。

「いや、2割」

「なんでやねん！」これでも値切りよるんかいっ！！！」

電話の向こうで、ガタンという音がした。きっと、テーブルか何かをひっくり返したのだろう。

「じゃあ、交渉成立 またな」

「ちよ…待つてやー」…

プチ。

夏丞は、電話を容赦なく切つた。

兄貴つて凄すぎる。あいつに、値切り成功（？）するなんて…。

雪太は変なところで夏丞を感心していた。

「じゃあ、トンマのところへ行くぞ」

「へ？」

雪太は間抜けな声を出す。

「オレも…？」と、雪太は自分を指差す。

「もちろん。所有物であるお前も来るんだよ」

「そうか…オレは所有物…って、納得できるかボケーッ！！！爽やかな笑顔に、うつかり納得しそうになってしまった。

「兄貴、日本語間違ってるよ」

雪太は夏丞を睨み据える。

「全然」

夏丞は雪太の襟首を掴むと、引きずるようにして家を後にした。雪太に選択権など、自由などなかつた。

「あらあら、仲がいいわね」

「あいつ、結局何しに来やがったんだ？」

父親は腕を組みながら、眉間にしわを寄せ、一人の後ろ姿を見送つていた。

「それにしても、せつちゃん連れてかれちやつたけど、いいのあなた？」

「ハウツ！？」

マリアの言葉で気付く父親。

「あいつにやあ、まだまだサンタの心得つてもんを教えなきゃなんのに！あのクソ坊主ー！！」

「大丈夫よ。お腹が空いたら帰つて来るわ」

「マリア…」

マリアの一言で、ガクツと父親の力は抜けてしまった。

トンマから無理矢理引きし、ソリを手に入れた夏丞は、手綱を握り締めていた。

「兄貴、今から何処行くんだ？」

夏丞の後ろに大人しく腰を据えている雪太は、夏丞に尋ねる。

「今回の目的といったところかな」と、夏丞は笑顔で答えた。

「メリ、クリ、北極ヘレツツゴーー！」

夏丞は楽しそうに、掛け声をトナカイにかける。

「え？！ほ、北極つ！？」

雪太が驚いている暇もなく、ソリは動き出し、空を飛ぶ。シャリン、シャリンと季節外れの鈴の音を響かせて。

「あのぉ、何で北極に行くんっすか？」

うきうきの夏丞とは対照的に、雪太のテンションは低い。

「寒いから」

「そりや、寒いのはわかってるよ」

「氷があるから」

「氷？」

夏丞の解答は全く答えにつていなかつた。

雪太の心持ちは明るいものではない。夏丞という存在がそうさせているのもあるのだが、それとは別のところに原因がある。

それは今の季節、待ちに待つた夏だからだ。雪だるまの姿では、夏など天敵だった。夏の間中、冷蔵庫の中で夏カミン眠。夏を楽しむという事を忘れてしまっていた。

それが今はもとの人間へ。

夏といえば、青い海、白い砂浜、照り付ける太陽、水着ギャル。

奪われた青春を取り戻そうとしていた矢先、悪魔の登場。いや、訂

正しよう。大魔王だ！

雪太の夢に描いていた夏は、早くも崩れ去ったのだ…。

「はああ、オレの夏はいぢり何処？」

「ゆきん」「ドンマイ」

「ドンマイ」

トナカイのメリとクリは、雪太を慰める。笑顔で。

「嫌味でしょ。その顔」

雪太はメリ、クリを睨む。

「ハつ当たりはやめろよー」

「みつともないぞ」

トナカイに言われる雪太。何とも情けない。

「涼しくなつてきたな」

夏丞の言葉に、うなだれていた雪太は顔を上げた。

「雲、グレーじゃん」

いつの間にか、灰色の雲の中をソリは駆け抜けていた。

「もうすぐか?」と、夏丞はメリ、クリに尋ねる。

「かもね」

「かもね」

不確定な答えが返ってきた。

「おい、わかんねえーのかよ」

雪太がその反応に突っ込む。

「北極行つた事ないもん」

「ナイナイ。ゼーんぜん、ナイ!」

「トナカイのくせに」と雪太が呟くと、

「トナカイは北極にイナイ!!!」

「そんな事もわかんねえのか、空っぽー!!」とメリ、クリにはしつかりとそれが聞こえていた。

「おい、空っぽ」

夏丞が雪太を呼ぶ。

「空っぽはヤメテ下さい」

「ゆきんこ」そろそろコート着なくていいのか?」

「何で?」

「北極だぞ」

いつ着たのか、すでに夏丞はコートを着込んでいた。しかも、もこのフラー付き。

「どつから出したんだよ」

「四次元ポケット」

「パクリかよ!」

雪太は、以前フラフープを出し、

「通り抜けフープ」と抜かしていた父親の顔を思い出す。やっぱり
親子だ。

「いいよ。何かしらないけど、スノーマンが耐寒性できたからさ」「ここで、スノーマン（＝雪だるま）姿になつていた事が夏丞に知られれば絶対、馬鹿にされると思い、濁した。だが：「そうだな。ゆきんこは、スノーマンだもんな」「え！？」

夏丞は何故か知っていた。

「それにしてもスノーマンって、ネーミングセンスないな」と、夏丞は笑う。

「うつせえーなあ。あん時は必死だつたんだよ！ってか、何であんた知つてんの？！」

「ゆきんこ」

夏丞が微笑みを向ける。

「な、何？」

夏丞から北極よりも寒いものを感じるのは、

「言葉遣い」

「あ……」「め……」

雪太が謝るか謝らないかのうちに、夏丞は雪太の頭をわじづかみにする。

「い、だだだだっ！……！」

雪太は泣き叫ぶ。

「雪太」

優しい、優しい声で夏丞は雪太の名を呼ぶ。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……！」

雪太は必死に謝る。

「次から気をつけろよ。次はねえーぞ」

一瞬、夏丞から笑みが消えた。

「ハイツ！」

雪太は裏返った声で返事をする。

「よろしい」

再びもとの夏丞の表情に戻った。

「空っぽ、ドンマイ」

「ドンマイ」

メリ、クリは笑って声をかける。

「空っぽじやねえ！ナメとんのかゴリラアツ……」と雪太は、メリ、クリに威嚇する。

「ハつ当たりはやめのよー」

「みつともないぞ」

デジヤブ。

そうこうしている間に、ソリは厚い氷の陸を発見する。そして、そこに降り立つた。

「ここ北極？」

雪太はメリ、クリに確認する。

「うん、北極」

「おいら達が連れて來たんだ北極に決まつてんだろ、空っぽ」「空っぽじやねえって言つてんだろ？がつ！－！一応、確認しただけだろ！？」

どうやら、雪太とメリ、クリの相性は最悪のようだ。

「じゃあ、氷削つてこい」

雪太は夏丞に鑿と木づちを渡される。

「何デスカ？コレハ」

目をしばたかせる雪太。

「削つてこい」

有無を言わせない圧力がそこにあった。

カーン、カーン

鋭い音が辺りに響き渡る。

「何でここに来て氷削んだよ」「よ

雪太はぶつくさ文句を垂れながら、削った氷を集めていた。

「ここ”だからこそだ”

「うわっ！」

何の気配もなく、夏丞が後ろに立っていた。かき氷機を抱えて。

「兄貴、何それ」と、雪太はかき氷機を指差す。

「かき氷機」

「じゃなくて、何で持つてんの？」

「四次元ポケットから出した」

「パクんなつて！」

夏丞は雪太が削つた氷をかき氷機にセットすると、削り始めた。シャリ、シャリと涼しげな音が聞こえてくる。

皿にこんもりと、雪のようにサラサラになつた氷が乗つた。夏丞はそこに、イチゴシロップをかける。氷は、シロップの重みでその身を沈ませる。

そこにスプーンを差し入れ、たっぷりとシロップのかかつた氷を口に運ぶ。

「美味しい！」

夏丞、ご満悦である。

雪太でも、見た事があるかないかくらいの、夏丞の邪氣の無い嬉しそうな笑顔がそこにあつた。

「そういえば兄貴つて、大のかき氷好きだつたけ」父親に勘当されて家を出た夏丞とは、会う事はほとんどない。その年月で、すっかり自分の兄の好物を忘れてしまつていた。

いい兄貴とは言えないが、たつた一人の兄弟だ。久しぶりに元気そうな姿を見て、今日の前で自分が苦労して取つた氷でかき氷を美味しそうに食べているのを見れば嬉しいし、やつぱり憎めないなと思う。

それがちょっと卑怯だと思つたりもするが。

「まったく、寒い所に来てわざわざかき氷食つてるなんて、兄貴変わつてるよな」と、雪太は3杯目に入ししようとしている夏丞を笑つて言つ。

「本当はな、お前を食つてみよつかと思つてたんだ」シャリシャリとかき氷機を動かしながら、夏丞は言つた。

「は？」

「お前、雪だるまになつてたんだろ？ シロップかけてみたらどうかなと思つてさ」

悪戯っ子のように、夏丞は笑う。

「…これが、夏丞が帰郷したワケ。雪太の背中にゾクリと寒気が走った。

「オレ、死んじまつかもしけねえーし、もとに戻つて欠けてたらどうすんだよ」

「オレに都合の悪い事は何一つ起こりはしないよ」

サクッと氷をすくう。

血の気が引きました。

「でも、残念だなあ。ゆきんこ元に戻つてんだもん」

夏丞は本当に、残念そうな顔をする。おまけに、溜め息まで付けて。

「さ、探そよ！何か一つでもあるハズだよ！！」

雪太は今はスノーマンではないのに、何故だか必死に夏丞に食いつく。どうやら、あまりの衝撃発言に混乱しているようだ。

「んー」

夏丞はかき氷を口に運びながら、考えてみる。

「…………」

サク、モグモグ

「…………」

シャリ、シャリ

4杯目。

「……無いんデスカ？」

サク、モグモグ

「…あ！」

夏丞は突然、声を上げる。

「あつた？！」

雪太は期待に、目を輝かせる。

「ゆきんこは、暇潰しにはなるかもね」一応、ありました。でも、自然と田から水が溢れてくるのは何故でしょ？」

「あはっ、あははは……」

雪太は、笑うしかなかつた。

「ゆきんこ、楽しそうなところなんだけど、後ろ」相変わらず夏丞はかき氷を食べている。

雪太は笑つた顔のまま、後ろを見る。少し遠くに、白いモコモコした大きなものが居た。

「ガオーッ！－！」

それが立ち上がり、威嚇してきた。

「ガオ？」

雪太はすぐにそれが何であるか判断がつかず、首を傾げる。

「白クマだね」

夏丞はかき氷を食べながら、その生き物を観察していた。雪太の顔が蒼くなる。

「あ、ーっ！－！」

雪太は叫んだ後、一目散に逃げる。

「ガオーッ！－！」

その後を白クマが追い掛ける。

第1ROUND開始！－！

白クマは、かき氷を食べ続けている夏丞に見向きもしないで、雪太だけを追い掛ける。

「空っぽが喰われる」

「美味いんか？」

離れた所にいたメリ、クリも傍観していた。

「イヤーッ！誰か助けてーっ！！」

一時間後。

「…チクシヨウーはあ、はあ…あの白だるまめ…！」

「ゆきんこ」

「うつわあー！」

氷の塊の後ろに隠れないと突然、いつの間にかに居た夏丞が後ろから声をかけて来た。

「コレを着るといいよ

にっこりと差し出されたコレという物。

「コレ…」

「大丈夫、コイツはみんなのアイドルで人気者だろ？」

何処まで知つてんだこの人。情報を流したのはあいつか？

雪太が別の所に考えが及んでいると、知らずにコレという産物を持たされていた。

白クマは雪太がいなくなり、辺りをキヨロキヨロとうかがいながら、お探しの御様子。どうやら、しつこい御性格をお持ちのようだ。そこへ颯爽と現れる丸い影。

「ガオ？」

白クマは何だという顔で、それを見つめる。

「オレはみんなのアイドルで人気者のスノーマン…さあ、オレと友達にならうー！」と、雪だるまの着ぐるみを着た雪太は、爽やかに言づ。

「ボクと握手」

後園にいる誰かのように、手を差し出す。

「.....」

白クマは考えた。

コイツが何なのかを。

選択肢。

- B 嘰えない
- A 嘰える

数秒後に答えは出た！

A 嘔える

第2ROUND開始！！

「イヤアーッ！！助けてーッ！！！」

逃げる雪だるま、追い掛ける白だるま。

「あいつ、バカだな」

「うん、やっぱり空っぽだ」

何度もかに目の前を通過する雪太（ただ今、スノーマン）を冷静な目で、傍観し続けるメリとクリ。

「ゆきんこって、暇潰しには持つてこいだな」

楽しそうに、かき氷を食べる夏丞の姿がそこにあった。

かき氷は雪太という要素が入り、いつも以上に美味しく感じられる。やはり、食事は楽しく食べなければ美味しいないと、夏丞の心に刻まれる。

「マジで勘弁してーっ！！」

雪太の叫びは虚しく、氷の大陸に響いていた。

三時間後。

「空っぽ喰われなかつたな」

「やつぱり美味くないんだよ。残念だな」

引き千切られたりした着ぐるみはボロボロ、息絶え絶えの雪太に、

優しさのないメリ、クリの言葉が降り懸かる。

「ゆきんこ、帰るぞ。そのままそこにへばり付いていたなんなら、い
いけどな」

冷たいなんて関係なくなつて、氷の地面に雪太は倒れていた。

「が、がえ、り、ま、ず」

雪太は顔だけ上げて言った。

「じゃあ、早くソリに乗れ」

「よいしょつと」

雪太はソリの中の物におそれつつ、何とか身を納める。

「……」

気にしないようにとしていたが、どうも性分らしく、それはできな
いらしい。

「あのお、冷たいんですけど。これ、持ち帰るんですか？」

雪太は自分を圧迫している氷の塊を指して言つ。

「もちろん」

夏丞は頷く。

「四次元ポケットに入れてくれませんか？」

「溶けちゃうだろ」

そうなんだ。冗談で言つたのに。

「出発するよ」

「飛ぶよ」

メリ、クリは声をかけ、ソリを引く。

「う、つ、重つ」

「カースケ、氷で重い」

さすがに、メリ、クリでも人間一人、プラス抱き抱えるのがやつと
の氷の塊は重い。

「頑張れ」

夏丞の激励の一言。

「ちえーっ」

「水分何かくれよ」

催促するメリ、クリ。

「はい」

メリ、クリは口の中に何かをほりつ込まれた。

「ん？甘い」

「飴かよー！子供だましだあ！！」とクリは叫んでいたが、

「おいら飴スキ」と、メリはにこーっと笑った。

「メリ、文句言えなくなるじゃん」

「おいら、文句ないもん」

クリは溜め息をつくと、メリと一緒にソリを動かし出した。

ソリはふらつきながらも氷の大陸を後にし、彼らの家路へと向かう。

「これ、何で溶けないの？」

段々と暑くなつてくるが、氷が溶けている様子はない。

「秘密」

夏丞にとつてはいいのだろうが、メリ、クリは重さの変わらないソリを引き、バランスを失いながら大変そうだ。

「お、重い」

「重ーい！ 餅なんかじゃ安いぞ！！」

それでも何とかソリは進む。だが、ここで思わぬ事態に遭遇する。

「もしかしたら、ヤバイかも」

「ヤバイ、ヤバイ！！」

メリ、クリがある場所で騒ぎ出した。

「何がヤバイんだ？」と、雪太は首を傾げる。

「オレ達、雷雲の中に入つたみたいだな。早く抜け出さないと危ないぞ」

常に冷静な夏丞だが、この時ばかりは険しい顔をしていた。

「本当にそう思つてる？」

険しい顔をした夏丞の手には、スプーンとかき氷が握られていた。ゴロゴロと黒い雲の中で、雷が唸つている。数秒間に、ピカツと光る。

「メリ、クリ早く出るよー！」

雪太は焦つて声をかける。

「早くしてるよー！」

「重いんだよー！」

メリ、クリからは汗が噴き出していた。

「兄貴！ この際、仕方ないからコレ捨てちまおつよーー！」

雪太は氷の塊に手をかける。すると、その手を素早く夏丞が掴む。

「氷じゃない。お前だ」

「え？」

この瞬間雷が光り、一人の顔をくっきりと照らし出した。
訝しげな顔をしている雪太は、夏丞の表情をうかがう。
夏丞の顔は、冗談を言つているようには見えなかつた。

「オレより、氷かよ！…この悪魔っ！…」

再び雷が光る。

夏丞は無言で雪太をクリの方に押しやり、ソリから押し出した。雪太はバランスを崩し、どさつとクリの上に尻餅をつくように乗る。
夏丞は自分を睨み据えている雪太を無視し、クリとソリを繋ぐ綱を外し始めた。

「お、おい、何やつてんだ？！」

クリは、夏丞の行動に慌てる。

夏丞は綱を外すと、

「クリ、行け！」とクリの体を叩いた。クリは訳がわからなかつたが、夏丞の真剣さと気迫に押され、駆け出す。

「お前はしつかり掴んでろよ！」

夏丞は、遠ざかつて行く雪太に向かつて叫んだ。

「あ、兄貴！何でオレを…」

夏丞の行動に、驚き戸惑つていた雪太だが、すぐに危ない状況下にまだいる夏丞に気付く。

「兄貴も早く逃げろ！…」

ソリを引いていないクリの足は早く、大分遠くなつてしまつた夏丞に叫んだ。

その時だつた。雷が一番光つたかと思つと、細く鋭い稲妻が夏丞の居るソリに直撃した。

「兄貴ーっ！…」

目の前に大きな雲が流れてきて視界を遮り、完全に成長しきった雲の中は雨と突風が吹き始め、雪太を襲った。

何とか地上に降り立つた雪太はクリの背から降り、がくりと膝を落とす。

「兄貴…」

「おい、ゆきんこ」
ぽた…ぽた…と髪に付いた雨の滴とともに、涙が零れ落ちた。

クリが異変に気がつき、雪太に声をかけた。

雪太はゆっくりと顔を上げる。冷たい風がふわっと涙で濡れた頬を撫でた。

この季節にはありえない冷たい風。

空を見上げると、白い粉が降っていた。

「ゆ…き?」

まさかと思った。今は、夏真っ盛り。雪など降るはずはない。

雪太は、掌を広げてみた。そこに、雪らしきものが舞い降りる。

「これ…もしかして…」

雪太の頭に過ぎたのは、夏丞がなんとしてでも持ち帰ろうとした大きな氷の塊。

きつとあの時、氷は碎けたのだろう。

「…バカ兄貴」

雪太は俯き、呟いた。

意地張つてないで氷を捨てれば、一緒に逃げられたかも知れない。
それなのに、自分だけを逃がして…。本当に兄貴はバカだ。

「誰がバカだつて?」

背後で声がし、雪太は驚いて振り向く。と、目の前には迫った手。

手?

次の瞬間、頭をわしづかみにされた。

「いででででで！」

「言葉には気をつけると言つただろ、ゆきん」「もつ会えないかと思つていた人物が今、目の前にいる。この頭の痛みが今は嬉しく感じる。

「あ、兄貴、無事だつたのか！？」

雪太は苦痛に堪えながら、嬉しそうに笑う。

「当たり前だろ」

夏丞はフンと鼻で笑い、口端を持ち上げた。

「でも、雷が直撃したじゃん」

「あれは、氷に当たつたんだよ。その時オレはすでに、メリに乗つてたしな」

「兄貴、助けてくれありがと」と雪太は、はにかみながら笑顔で言った。

「バ、バカか！お前はついでだ！つ・い・で！」

夏丞は照れ、雪太の頭を掴んでいる手が緩んだ。

「照れてんの？」

雪太は、そんな夏丞を悪戯っぽく笑う。

夏丞はその雪太の態度にムカつとし、緩んだ手に強く力を入れた。先程よりも倍以上。

「いででででででーーー！」

その日の町は、清々しい冷たい風がそよぎ、汗だくになる人々の気持ちを解した。

僅かに一時だけ舞つた氷の宝石は、氣まぐれな夏のサンタからの贈り物。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9783e/>

気まぐれな夏のサンタ

2010年10月28日03時24分発行